東京大学東洋文化研究所所蔵伊藤義教文庫の開設

ITŌ Gikyō Collection Owned by the Institute of Oriental Culture, University of Tokyo

青 木 健*
AOKI Takeshi

I. 日本のイラン学文献の概要

日本のイラン学が端緒についたのは、20世紀初頭。以下の先駆者達が、言語学・宗教学の両面からイラン語文献にアプローチしていった頃である。⁽¹⁾

矢吹慶輝 (1879-1939)⁽²⁾: 東大宗教学科助教授→大正大学教授

荒木茂 (1884-1932)⁽³⁾: 東大言語学科講師→夭折

足利惇氏 (1901-1983)⁽⁴⁾: 京大梵文学科教授→東海大学文学科教授

八木亀太郎 (1908-1986)⁽⁵⁾: 東大言語学科助手→松山商科大学教授

伊藤義教 (1909-1996): 京大梵文学科教授

日本には、イラン学に関する文献を系統的に蒐集している研究機関は存在しないので、上記5名のイラン学者たちの個人蔵書が、国内で参照できる主な文献である。⁽⁶⁾ 而して、其々の蒐集は、所有者たちの経歴を反映して次のような運命を辿った。

矢吹慶輝氏の蔵書=東大東洋文化研究所「矢吹慶輝文庫」:⁽⁷⁾ 約360冊。

荒木茂氏の蔵書=東大言語学科「荒木茂文庫」:⁽⁸⁾ 全1224冊。

足利惇氏氏の蔵書=東海大学附属図書館「足利惇氏文庫」:⁽⁹⁾ 全1268タイトル。

八木亀太郎氏の蔵書=昭和20年の東京大空襲で焼失。蔵書を失った後、八木氏は郷里松山でドイツ語教授に転じる。⁽¹⁰⁾

また、これ以外に日本国内では、東京外国語大学が米国・ペンシルバニア大学の故・M. J. ドレスデン教授 (1911-1986) のインド・イラン学関係の蔵書を購入している。

M. J. ドレスデン氏の蔵書=東京外国語大学附属図書館「M. J. ドレスデン文庫」:⁽¹¹⁾ 全2947冊。

* 日本学術振興会特別研究員

Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science

II. 日本のイラン学文献の特徴

現存する上記の4つのイラン学文庫には、各々以下のような特徴がある。

- ①矢吹慶輝文庫：矢吹氏の本領は宗教学・仏教学であり、中国仏教研究の一環としてマーニー教研究に進まれた印象がある。従って、19世紀の英独仏のマーニー教研究書や、中国語資料が中心である。
- ②荒木茂文庫：19世紀から1920年代までに出版されたイラン学のテキスト・研究書を網羅している。ただ、荒木氏がアメリカ（コロンビア大学）で学ばれた為か、リアルタイムのヨーロッパ（特にドイツ）で勃興したイラン学の新動向には対応し切れていない。
- ③足利惇氏文庫：足利氏は、欧州でイラン学を修めて帰国なされたものの、大学では梵語梵文学の講座を担当された。蒐集された文献もそれに倣って、インド学関係が主になっている。
- ④M. J. ドレスデン文庫：ドレスデン氏は、インド学から中央アジア系イラン言語学へ進まれた研究者である。その為、インド学関係とホータン・サカ語関係のテキスト、研究書、そして特に概説書が充実している。

III. 伊藤義教文庫の開設

これらに加えて、2003年3月28日、東京大学東洋文化研究所が故・伊藤義教氏の蔵書をご遺族から寄贈され、国内第5のイラン学文庫を創設する運びになった。⁽¹²⁾ 総数849冊である。また、この文庫の蔵書目録は、永ノ尾信悟・青木健（編）『東洋学研究情報センター叢刊3 東京大学東洋文化研究所蔵伊藤義教文庫目録』、東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター、2003、として近く出版される予定である。更に、伊藤義教文庫のデータは、これより一足早く東京大学蔵書検索 OPAC 上で既に公開されている。

IV. 伊藤義教文庫の特徴

伊藤氏の文献蒐集の中心は、古代・中世イラン語によるゾロアスター教系テキスト類にある。しかも、原典解説に長じた伊藤氏だけあって、優れた鑑識眼で選んだ良質のテキストが多い。この意味では、実際の冊数以上の価値を含んだ文庫である。また、ゾロアスター教研究に特化した点では、宗教研究的な志向の強い①矢吹慶輝文庫と一致し、1930年代から90年代と云う蒐集年代に関しては、ほぼ②荒木茂文庫と相補い合う形を取っている。更に、伊藤義教文庫は以下に述べるような蒐集上の特徴を持つので、中央アジア系イラン語文献を重視する④とも相互補完的な関係にある。①②は同じ東大内に収蔵されているので、併せてご利用頂けたら幸いである。これらに加えて、長い研究キャ

リアを持つ伊藤氏だけに、20世紀初頭の欧米のイラン学者と交わした書簡や抜き刷り、⁽¹³⁾戦前の出版物なども貴重である。また、大量の未発表自筆原稿も見逃せない。

伊藤氏の文献蒐集の特徴は、同時代のイラン学の趨勢と比較することによって一層明瞭になる。即ち、20世紀初頭以降のイラン学は、中央アジアで発見された敦煌・トゥルフアン文書の解説をメインテーマとして発展してきた。しかし、伊藤氏は、敢えてこれらの中央アジア系イラン語文献に背を向け、イラン本国のゾロアスター教系文献に研究対象を絞られた。そして、これらの解説の為に、中央アジアとは正反対の西方セム語系の語学、特にアラム語と聖書の研究に進まれたのである。要約すれば、伊藤氏のイラン学は、ゾロアスター教系イラン語文献を、セム系言語の知識を応用して解説しようとする試みであった。この特徴は、伊藤義教文庫の文献蒐集の中にはっきりと影を落としている。

矢吹氏・荒木氏が日本のイラン学に先鞭を付けてから約100年にして、漸く日本のイラン学も世界のレベルに追いつきつつある訳で、このように貴重な文献が東洋文化研究所に寄贈された意義は大きい。もし十分に活用するとしたら、日本が世界に誇るイラン学研究の成果が期待できるであろうし、たとえ今すぐに効果が現れないにしても、伊藤氏の蔵書が東洋文化研究所に収められている事実は、将来何らかの形で実を結ぶ筈である。

注

- (1) 筆者とは別の角度から日本のイラン学史を纏めた一文としては、岡田明憲「日本のゾロアスター教研究と伊藤義教博士」(伊藤義教『ゾロアスター教論集』平河出版社、2001、557-561)を参照。
- (2) 矢吹慶輝氏の業績と生涯については、矢吹慶輝『マニ教と東洋の諸宗教—比較宗教学論選—』佼成出版社、昭和63、393-419に付された芹川博通氏の解説を参照。
- (3) 主著は、荒木茂『ペルシヤ文学史考』岩波書店、大正11。生涯については、大野延胤『風の如くに：荒木茂の生涯』近代文芸社、1995参照。
- (4) 主著は、足利惇氏『足利惇氏著作集』全3巻、東海大学出版会、1988。生涯については、第3巻『随想・思い出の記』に詳しい。
- (5) 主著は、八木亀太郎『八木亀太郎論文集』全2巻、西田書店、1988。生涯に関しては、八木亀太郎『寒来暑往』(随筆集)松山大学温山会、1988、及び八木亀太郎『同行三人櫻三里』(随筆集)松山大学温山会、1991参照。
- (6) 実は、現役研究者の蔵書も多いのだが、一般に公開されている訳ではないので、ここでは触れない。
- (7) カタログは出版されていない。1952年当時の受け入れ分類表が存在するらしいが、筆者は未見。概要については、各年度の『東京大学東洋文化研究所要覧』中の「図書・資料」の項目参照。

- (8) カタログとしては、田中於菟彌（編）『荒木茂氏蒐集波斯關係圖書目録』啓明會紀要第十五號，1934参照。尚、この荒木文庫は、「関東大震災で焼失した」と解説されることが多いが、誤解である。ほぼ全巻が東大言語学科に現存している。
- (9) カタログとしては、東海大学付属図書館『足利惇氏文庫目録』，1983参照。
- (10) 八木亀太郎氏の令嬢，島川恭子さん（愛媛県松山市在住）による情報。
- (11) カタログとしては、東京外国語大学付属図書館『故M. J. ドレスデン教授旧蔵インド・イラン言語学コレクション』，1989参照。
- (12) 寄贈に際しては、未亡人の伊藤恵美子さん，令嬢の高山恭仁子さんのお世話になった。記して感謝したい。
- (13) 未発表自筆原稿に関しては、永ノ尾信悟・青木健（編）『東洋学研究情報センター叢刊 3 東京大学東洋文化研究所所蔵伊藤義教文庫目録』，東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター，2003，ix-xix参照。